◎1962年フルブライト同窓会開く

学生時代のような熱気を秘めた1962年同窓会の面々

1962年フルブライト同窓会が，93年２月18日，18名が出席して，東京ステーションホテルで開催された。

小林昌彦氏（元毎日放送ニュースキャスター）の司会で始まり，長坂健二郎氏（万有製薬）の発声で，参加者の健康を記念して乾杯した後，フランス料理を味わいながら，近況を語り合い，旧交を暖めた。

アメリカではクリントン政権が発足した直後にあたり，席上，メインスピーカーとして桐渕利博氏（オムロン）により，「21世紀への指針・日本の選択」と題してスピーチが行われた。

桐渕氏は，新しい変革の時代にあたり，日本の政治，行政，経営，教育など各分野において，日本版ペレストロイカが行われればならず，われわれ自身も傍観者ではなく，将来に向けて積極的に発言，行動すべきであると，広い視野から情熱をこめて訴えられた。

もともと当日の参加者は論客ぞろいであったせいか，岩渕氏のスピーチに触発されて，意見の表明が相次ぎ，司会者が困るほど活発な議論の応酬のうちに，予定の時間はすぎて，あたかも30年前のオリエンテーションの時のような，若い熱気と刺激に満ちた一夕であった。

時期が入試シーズンのさなかであったため，多数の大学関係者が出席できなかったことを反省し，次回は，各オリエンテーション・グループともれなく連絡をとり，より多くの参加者にとって有意義な充実した会とすることを申し合わせた。

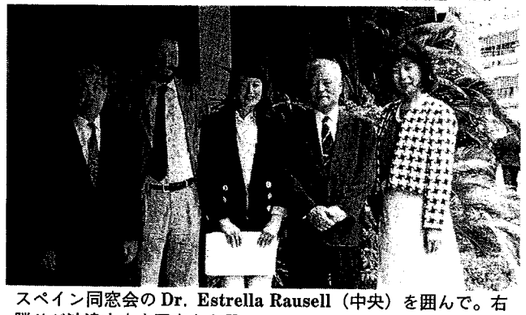
なお，1962年フルブライト同窓会についてのご意見，お問い合わせはFAX:0466-22-9733　（安〈田中〉咸子）にお寄せください。　（正野敏夫）

◎スペイン・フルブライト同窓会からの訪問者

93年春のことである。Dr. Estrella Rausell と名乗る女性から突然，電話をいただいた。スペインのフルブライターの一人で，和光市にある理化学研究所の研究プログラムに参加している。近く帰国するが，スペイン・フルブライト同窓会の活動の参考にするために，日本の同窓会の活動状況をききたい，とのことだった。喜んで会うことにして，４月末，日米教育委員会のヤン事務局長も交えて昼食をともにした。

スペインでは，最近，フルブライト・プログラムにスペイン人事院所管の国費留学生も統合されたため，フルブライターの数が多くなり，同窓会活動も次第に活発化しつつあるとのこと。日本のガリオア・フルブライト同窓会の活動には感銘を受けたようすだったが，スペインではフルブライターがアカデミア主体のため，活動の中心は同窓生間の懇親，後輩の指導などにあるという。

Dr. Rausell は25歳の医学博士で，ニューロシステムの限界に挑んでいる。日本政府資金による基礎研究プログラム Frontier Research Program のもとで，人間の脳，電子などの先端分野に挑戦できることに感謝していた。ちなみに理化学研究所（科学技術庁所管の特殊法人）のこのプログラムは，15年計画で，年間予算は約30億円。４グループ，各グループ３，４チームで運営されている。参加者は各チームのリーダーが，国籍を問わず，適任者を選抜する。チームリーダーの半数近くが外国人で，メンバーの参加期間などすべてをリーダーが決定する，国際的かつ目的志向的なプログラムとのことである。　（渡邊　宏）



スペイン同窓会の Dr. Estrella Rausell（中央）を囲んで。右隣りが渡邊宏東京同窓会会長

編集後記●昨年秋に編集作業を引き継ぎました。1989年度のジャーナリスト・プログラムで１年間、ロサンゼルスに遊びました。本業は雑誌編集者、ということで、ふだん仕事でやっていることだから、と深慮なく引き継いだところ、予定より半年ちかく遅れてしまいました。インタビューでヤンさんがおっしゃった「若い世代の同窓生」に、私も属するわけで、今回の編集作業を通じてようやく同窓会の何たるかを知りました。NEWSLETTER も、より幅広い世代が参加できるメディアにしたいと考えています。　（西岡一正）

ガリオア・フルブライト東京同窓会事務局
〒102 東京都千代田区二番町9-2　電話（03）3221-1841　FAX（03）3238-0758

TOKYO GARIOA/FULBRIGHT ALUMNI ASSOCIATIONS
ガリオア・フルブライト東京同窓会

NEWSLETTER

No. 7　MARCH　1994

フルブライト計画の転機となった同窓会結成

インタビュー◎
JUSEC 事務局長を退任するカロライン・又野・ヤンさん

日米教育委員会（JUSEC）のカロライン・又野・ヤンさんが３月末で事務局長を退任する。「ヤンさん」の愛称でフルブライト・プログラム内外の関係者に親しまれた，いわばフルブライト・プログラムの「顔」。退任を前に二十余年におよぶフルブライト・プログラムとの関わりを振り返ってもらった。

Caroline A. Matano-Yang

ハワイ・オアフ島生まれの日系２世。父は西本願寺派の僧侶。スミス・カレッジ卒業後，国連本部に勤務。ミシガン州立大学で修士（Edudational Administration）。1972年，日米教育委員会交流部長，翌年から事務局長を務める。

私が初めてフルブライト・プログラムに出合ったのは，主人がフルブライターだったからです。台湾で講義をすることになった主人の Fulbright Spouse として参加させてもらいました。１年間台湾に滞在して，それが初めて外国に住む体験になりました。

日本には71年に主人の転勤で来ました。日本で何かやりたいと思っていたところ，ちょうどフルブライトで留学のためのカウンセラーを募集していると聞いて，この事務所（JUSEC）を訪ねました。

最初は週に２，３回ボランティアで来ていたんですが，翌年の５月になって，アメリカ人の前任者が帰国したので交流部長として“正社員”になりました。事務局長になったのは72年５月です。

その当時はフルブライト・プログラムはなくなるんじゃないかという噂があったほど，きびしい時期でした。というのは，アメリカ政府の69年度予算でフルブライト・プログラム全体の予算が半分にカットされたんです。日本のフルブライト・プログラムでも，数年前まで100万ドルを超えていた予算がいっきょに40万ドルに減り，スタッフも25人が15人にカットされました。

私が入ったときでも，予算はまだ100万ドルに届かない，小さなプログラムでした。79年になって，日本政府がアメリカ政府との協定で，フルブライト・プログラムの経費をフィフティ・フィフティで負担することになりました。プログラムが始まって28年目でようやく日本政府が拠出金を出すことになったんです。それからは予算はどんどん伸びていきました。それが，この20年間の第一のターニングポイントでした。

もう一つのターニングポイントは，フルブライト・プログラム30周年を迎えた82年に同窓会を結成したことです。同窓会の存在がなければ，現在のプログラムはもっと小さくて，そのイメージやプレスティージ，影響力はかなり違っていたんではないかと思います。もちろん予算面でもずいぶん貢献していただいています。同窓生の皆さんはよくご存知ですが，82年からスタートした募金は年を追って増えて，93年には１億5000万円という額になりました。

この10年間は，同窓会のおかげでプログラムが大きくなって，いろいろな新しいことができたんです。たとえば，10年前初めてアメリカ側からも Non Academic Professional の人がプログラムに参加できるようになりました。日本側は最初から社会人も，大学院生のカテゴリーで，応募することはできましたが，アメリカ側は最初はほとんどが大学院生，それから大学教員でした。その

枠をPracticing Lawyer, Buisinesman, Journalist，建築家など学界以外の人たちにも広げることができたんです。

また，Recent B. A. Programという新しいプログラムを3年前からスタートしました。Recent B. A. つまり，アメリカの学部を卒業したばかりで，日本語や日本を勉強したいという優秀な若手を招くプログラムです。これも同窓会のおかげです。初年度は8人，去年は7人，今年はもっと増えると思います。というのは，同窓生の寄付はなるべく若い人に使いたいという意向があるからです。以前はPh. Dや研究員の方をサポートしていましたが，これからは若いRecent B. A. がより望ましいと思います。

ただ年次総会を開くだけの同窓会なら他の国にもありますが，このように寄付を募って，しかも，そのお金でアメリカ人を招いているのは日本の同窓会だけじゃないでしょうか。フルブライト元上院議員がよくおっしゃるんです，「どうしてドイツもフランスも日本の同窓会のようなことをしないのかな」と。日本人の国民性というか，「恩返し」という考え方がユニークですね。「恩返し」というと，企業に募金にいっても通じるんですね。企業のトップの方々も，戦後にフルブライト・プログラムが果たした役割のことをよくご存知ですからね。

同窓生の間でも，同窓会ができたことによってネットワークができたと思うんです。よくいわれますが，日本の社会はタテ社会で，ヨコのコンタクトがとてもむずかしい。とくに企業と学界のつながりが弱い。ガリオア・フルブライト同窓会を通じて，同窓生自身が輪を広げることができたのではないでしょうか。

ただ，日本の社会でも世代交代が進んでいます。それにどのように対応していくかが，私の後任者，そしてこれからの同窓会にとってのチャレンジだと思います。若い世代の同窓生に，どうやって関心をもってもらうか，どうやって同窓会の活動に参加していくのか，が課題になります。

かつてのフルブライターたちはジェネラリストでした。学位を取るためではなく，アメリカを知るためにアメリカに行ったのです。もちろん研究者もいましたが，実際にPh. Dを取る人はあまりいなかった。ほとんどの人が1年くらいの短い滞在で，アメリカを広く見てきました。

最近はスペシャリストの時代ですね。研究者も社会人もみんな専門的になっています。たとえばジャーナリストのリサーチ・テーマといえば，以前は「日米関係」ばかりでしたが，最近は「ヘルス・サービス」とか「環境問題」とか，専門的なテーマが多くなっています。

そういう世代の人たちが，同窓会の年次総会に来てもずっと年齢が上の人ばかりでおもしろくない，ということになりますね。だから，一つのアイデアとして，同窓会にも分科会を設立してみてはどうでしょうか。たとえば，ジャーナリストとか，法律関係の方とかの職業別，分野別の分科会なら，若い世代にとってはその道の先輩に会える機会になりますね。そのような分科会だと，若い人が参加しやすいと思います。　（聞き手・西岡一正）

◎新事務局長にシェパード氏を選任

日米教育委員会（JUSEC）では，3月末で退任するカロライン・又野・ヤン事務局長の後任に，サムエル・M・シェパード氏を選任した。新事務局長は公募され，日米両国からの応募者180名のなかからシェパード氏が選ばれた。就任は4月1日。

シェパード氏は現在，米国・シアトルにある非営利の学校法人American Cultural Exchangeの副会長で，シアトルの日米協会の活発なメンバー。幼少期から高校時代まで日本で育ち，フルブライターとして来日したこともある。また，平和部隊（Peace Corps）のボランティアとして韓国に滞在した経験もある。

竹村健一氏をゲストに 1993年度総会開く

ガリオア・フルブライト東京同窓会の1993年度同窓会は，93年4月21日，東京・丸の内の日本工業倶楽部で約170名の同窓生，関係者が参加して開かれた。

総会議長に渡邊宏同窓会長を選出して議事に入った。会長挨拶では，同年5月にワシントンで開催されることになっていたフルブライト上院議員の88歳誕生日記念晩餐会に，東京同窓会からも参加を招請されていたので，1万ドルを寄付し，当日滞米予定の川村茂邦前東京同窓会長ほかが代表として出席することが承認された。

次いで，フルブライト記念財団の全国理事会に出席された，東北から九州までの各地区同窓会長が紹介された後，1992年度会務報告，会計報告，1993年度予算が原案通り承認された。

第3回個人募金状況については，小西輝明副会長から，東京同窓会では，943名により総額2357万円，全国では1746名により4042万円にのぼったことが報告された。

引き続き，長い間同窓会のお世話をしてくださった池田政利前事務局長に対し，参加者全員の盛大な拍手のうちに，渡邊会長から感謝状が，小山八郎名誉会長から記念品がそれぞれ贈呈された。

講演の部では1953年フルブライト同窓生であり，テレビなどでおなじみの評論家・竹村健一氏が「新しい世界と日本」と題して講演した。

1993年度総会で「双方向化社会」の到来について語る竹村健一氏

竹村氏は，これからの新しい時代の3つの特徴として“Understanding Business”が盛んになること，情報化社会からより情緒を重んずる「感性社会」へ移行すること，さらに情報の一方的な発信から，受信側も送り手になる「双方向化時代」になるだろう，ということを具体例を挙げながら，わかりやすく話された。

その後，参加者の質問に答えて，円高についてはすでに92年末の段階で予想されたこと，これ以上円高が進んでも日本にとってメリットは少なく，今後はむしろ円安のすすめを提唱していることなど，世界の最新情報を交えながら，興味深い講演をされた。

講演会終了後，懇親会に入り，竹村氏や在日米国大使館広報・文化交流局長のポール・P・ブラックバーン公使，日米教育委員会のカロライン・又野・ヤン事務局長ほか，多数の招待者を囲み，同窓生どうし旧交を暖めるとともに，新しい友人をつくりながらひと時を過ごした。

（正野敏夫）

1993年度役員名簿

名誉会長　小山八郎

会　長　渡邊　宏

副会長　田中哲男（会長代理），行天豊雄，平野龍一
小西輝明，松原亘子，高澤廣茂，安　咸子

監査役　堀　憲明

			担当副会長
Foundation Liaison	委員長	堀江　昭	小西輝明
Alumni Meetings	委員長	上田俊男	安　咸子
	副委員長	正野敏夫	
Hospitality	委員長	久世　篤	高澤廣茂
	副委員長	三上紀史	
Publicity	委員長	西岡一正	行天豊雄
Administration	事務局長	加藤弓弦	田中哲男

ガリオア・フルブライト東京同窓会 1992年度決算および1993年度予算案

1992年度決算

収入の部	前期繰越	9,160,308
	寄付金	70,000
	会費	5,036,000
	受取利息	180,437
	受取手数料	1,000,000
	雑収入	42,351
	合計	15,489,096
支出の部	給料手当	1,847,512
	会議費	270,571
	旅費交通費	293,110
	通信運搬費	856,254
	事務用品費	171,125
	印刷製本費	2,911,042
	貸借料	389,280
	謝礼金	—
	委託費	145,593
	書籍調査費	—
	支払手数料	13,709
	交際費	393,250
	什器備品	890,293
	倉庫料	8,498
	会費等	4,000
	雑費	53,176
	予備費	—
	合計	8,247,413
収支残高		7,241,683

1993年度予算

収入の部	前期繰越	7,053,275
	会費	5,000,000
	受取利息	100,000
	受取手数料	3,750,000*1
	賃貸料	240,000*2
	合計	16,143,275
支出の部	通常支出	6,581,000
	給料手当	1,200,000
	臨時雇手当	840,000
	会議費	268,000
	旅費交通費	304,000
	通信運搬費	1,476,000
	消耗品費	182,000
	印刷製本費	890,000
	貸借料	130,000
	諸謝金	—
	委託費	392,000
	支払手数料	13,000
	交際費	358,000
	雑費	28,000
	予備費	500,000
	臨時支出	500,000
	募金趣意書	—
	什器備品	500,000*3
	合計	7,081,000
次期繰越		9,062,275

*1 財団からの募金手数料　*2 財団からのコンピューター賃貸料　*3 コンピューター関連費用

92年度寄付総額は1億8000万円に

——第3回個人募金は4000万円

1992年度の同窓会に依るフルブライト財団奨学生の為の募金額は1億8,723万円と過去最高の額になりました。これは1991年度より約7,200万円多い金額です。1992年度の募金額が多かった理由は二つあります。その一つは，フルブライトプログラム40周年記念事業と第3回同窓会員個人募金がこの年に行われたことで，この二者による募金額は5,658万円になります。その二つは，九州同窓会に依る4年毎の募金がやはりこの年に行われたこと，YKKとモービル石油が翌年分の寄付金を一緒に下さったことで，これらの合計は3,145万円になります。

上の二つの臨時的寄付金を除くと，1992年度の募金額が1991年度よりも少ないことに気づかれると思います。これは昨今の経済情勢悪化の為にこれまで継続的に御寄付下さっていた企業の中に本年は寄付中止をされた所があるからで，この傾向は1993年度の募金にも継続されると思われます。

第3回個人募金結果（地区別件数と金額）

地　区	会員数（名）	募金者数（名）	募金額（円）
北海道	90	41	690,000
東　北	167	86	1,950,000
北　陸	52	27	550,000
東　京	3,023	943	23,574,000
中　部	276	84	1,595,000
京　滋	272	92	1,942,340
大　阪	486	178	3,821,000
中　国	145	71	1,550,000
四　国	64	22	370,000
九　州	196	86	2,080,000
沖　縄	187	111	2,110,000
国　外	536	5	190,000
不　明	125		
死去者	548		
総　数	6,167	1,746	40,422,340

第3回個人募金の御礼

全国のガリオア・フルブライト同窓生の皆様による第3回個人募金の総額は別表の通り4000万円余りとなりました。いままで個々にお礼を申し上げませんでしたので，ご協力下さいました皆様にここに厚く御礼申し上げます。

ガリオア・フルブライト全国理事会会長　渡邊　宏
フルブライト財団　理事長　小山　八郎

なお，1992年度も別表の通り企業及び地区同窓会等からも寄付金を頂き，別表のような1993年度財団奨学生を迎えることが出来ました。　**東京同窓会事務局長　加藤弓弦**

1992年度企業等募金結果（単位 千円）

経常的寄付金	カーギルN.A.	5,000	130,650
	大日本インキ化学	5,000	
	GF中部同窓会	300	
	高橋産業経済研究所	5,000	
	国際経済交流財団	10,000	
	モービル石油(1)	5,000	
	国際経済交流財団	10,000	
	トヨタ自動車	5,000	
	小松製作所	5,000	
	味の素	5,000	
	日本興業銀行	5,000	
	三菱グループ	5,000	
	住友グループ	5,000	
	東京ゴルフ大会	10,300	
	GF東北同窓会	3,600	
	GF九州同窓会*1	20,000	
	モービル石油(2)*2	1,450	
	富士銀行	5,000	
	吉田工業（YKK）*3	20,000	
臨時的寄付金	40周年記念事業	16,944	56,582
	第3回個人募金	39,638	
合　計			187,232

*1：4年分　*2：翌年分　*3：2年分

1993 FULBRIGHT FOUNDATION GRANTEE LIST

NAME	DISCIPLINE/TOPIC	GRANT
RESEARCHERS (5)		
Mr. FUNK, Jeffrey L.	Business Management & Admin.	Nissan Motors
Mr. KAPLAN, David E.	Journalism	Japan Economic Foundation
Mr. KNEZEK, Gerald A.	Education	IBM Japan
Mr. MAKINS, James D.	Ceramics	Komatsu
Mr. SHRIBASTAVA, Paul	Business Management	Mitsubishi Group
STUDENTS-Ph.D. candidate & Professionals (12)		
Mr. ALTBACH, Eric G.	Political Science	Fuji Bank
Ms. ANGUST, Linda I.	Cultural Anthropology	Japan Economic Foundation
Mr. ATKINS, Everett T.	Japanese History	Dainippon Ink & Chemicals
Mr. GEORGE, Timothy S.	Japanese History	Takahashi Zaidan
Mr. HEINRICH, Lawrence W.	Political Science	Ajinomoto
Mr. LANE, David W.	Political Science	Industrial Bank of Japan
Mr. LIPPIT, Seiji M.	Japanese Literature	General Alumni Fund
Ms. McSWEENEY, Elizabeth J.	Sociology	Japan Economic Foundation
Mr. NUSS, Steven R.	Musicology	YKK
Mr. RICHTER, Giles M.	Japanese History	Toyota
Mr. SZYMKOWIAK, Kenneth F.	Sociology	Sumitomo Group
Ms. WELCH, Patricia M.	Linguistics	Japan Economic Foundation
STUDENTS-Recent B.A.s (7)		
Ms. HARMAN, Tanya R.	Education	General Alumni Fund
Ms. IGARASHI, Mitsuko	Political Science	Tohoku GARIOA/Ful. Alumni Assn.
Mr. LURIE, David B.	Japanese Literature	General Alumni Fund
Mr. MAYWAR, Drew N.	Physics	General Alumni Fund
Mr. McMAHAN, Gregory	Chemical Engineering	Shino Fund
Mr. RAY, Brian E.	Philosophy	General Alumni Fund
Ms. RICHITER, Gretchen L.	Interculture Communication	General Alumni Fund
JAPANESE STUDENTS (3)		
Ms. KIYOTAKI, Sonoko	Law	Mobil Sekiyu
Ms. TSUDA, Yumi	Political History	YKK
Mr. YAMADA, Masaru	Aguriculture	Cargill North Asia

◎フルブライト氏の88歳誕生日を祝う

フルブライト・プログラムの生みの親，フルブライト元上院議員の88歳誕生日の祝賀会が93年5月5日，ワシントンD.C.のANAホテルで開催された。

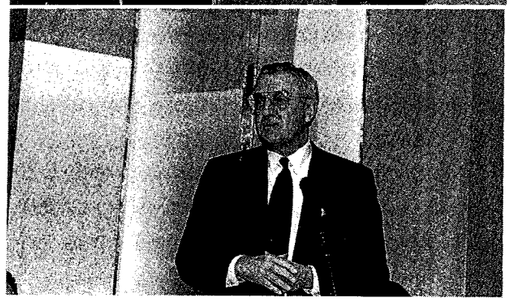
この祝賀会は米国のフルブライト同窓会が主催したものだが，日本ガリオア・フルブライト同窓会も1万ドルを拠出し，川村茂邦・前東京同窓会会長夫妻が出席した。ほかに日本関係者では，林啓一郎ニューヨーク同窓会会長，二瓶恭光・慶応義塾ニューヨーク学院長（元東京同窓会副会長），栗山駐米大使らが出席した。

祝賀会はデルーシア米国同窓会会長の挨拶で始まり，ゴア上院議員（ゴア副大統領の父）らが祝辞を寄せたあと，オペラ歌手アンナ・モフォの歌唱など，多彩なプログラムが繰り広げられた。

若いころにフルブライト氏の事務所で働いたことがあるクリントン大統領も特別ゲストとして出席した。大統領はスピーチの中で，「日本はフルブライト・プログラムのもっとも強力な支持者となっており，われわれはこれに対して大いに感謝している」と述べ，日本関係者に感銘をあたえた。

＊

なお，フルブライト氏は祝賀会からしばらくして入院されましたが，その後快方に向かわれ，3週間ほどで退院されました。



席上，渡邊宏東京同窓会会長から，フルブライト・プログラム40周年を記念してつくられたフルブライト氏の署名入りのネクタイ，トレーナーなどが記念品として贈呈された（**写真上**）。アマコスト氏はこれに応えて，自身がフルブライターとしてドイツに留学した思い出を披露するなど，なごやかな送別の会となった。

一方，新任のモンデール大使の歓迎会は昨年11月30日，全日空ホテルで行われた。元副大統領という大物大使の赴任とあって，1000人近い出席者が会場を生めた。同窓会関係の主席者は約160人を数えた。

スピーチに立ったモンデール氏は，日本からの米国留学生数が米国人の日本留学生数の10倍以上にのぼるという統計を知って，ショックを受けた経験を明かし，教育・交流を通じて日米の相互理解をより深めることの重要性をあらためて力説した。（**写真下＝ともに日米協会提供**）

米大使が交代，歓送迎会を開催

駐日米大使の交代にともなう歓送迎会が，フルブライト同窓会と日米協会の共催で行われた。

離任するアマコスト氏の歓送会は昨年7月，ホテルオークラで開催され，同窓会関係者約130人が出席した。

献身的な努力で支える「歓迎サービス」
——ホスピタリティ委員会の活動について

米国人グランティの日本での滞在をより快適なものにするために，東京同窓会のホスピタリティ委員会はさまざまな活動を展開している。最大のイベントは毎年秋，米国人グランティを招いての歓迎会だが，ほかにも地味な活動を続けている。同委員会には現在，4つの小委員会があるが，それらの活動の一端を紹介したい。

1.　歓迎サービス小委員会（太田隆次委員長）

4つの小委員会のうち，この小委員会が一番大変である。初めての日本滞在——まず成田空港到着から落ち着き先まで無事たどりつくことに不安になる。

この小委員会では成田での出迎えサービスをボランティアの人たちの献身的な努力で続けている。この4年間に出迎えた米国人グランティの人数は89年度19名，90年度21名，91年度18名，92年度18名の計76名にのぼっている。太田隆次委員長の多大な努力のもと，ボランティアとして参加してくださってる方々には，太田氏はもとより，成田在住の同窓生の柴田實，市村輝宜，川又邦雄，柳川浩一郎，飯田旦之，沢木弘久，川名好裕の各氏，そして東京在住の方々では渡邊宏同窓会長を含め，平賀雅子，伊東ノブ夫の各氏らである。

92年までは1つのターミナルビルに南ウイングと北ウイングがあり，出迎え場所も1カ所でわかりやすかったが，昨年からは第2ターミナルもでき，航空会社により到着ターミナルも異なるし，第2ターミナルはAゾーンとBゾーンの出口があり，出迎えもすんなりとはいかなくなった。

また，成田から東京まで，とくに米国人グランティのとりあえずの落ち着き先として多かった新橋第一，銀座第一両ホテルへの直行バスがなくなり，東京シティエアターミナルから各ホテルまでタクシーに乗せる必要が出てきている。

こうした出迎えサービスが，成田到着後，心細く感じている米国人グランティからきわめて大きな感謝と評価を受けているが，裏にはこうした苦労の積み重ねがある。

2.　文化活動小委員会（三上紀史委員長）

この小委員会では，米国人グランティに幅広い日本文化を紹介する機会を設け，日本理解の一助になるよう活動している。そのひとつは93年5月18日に行われた，最高裁判所および国会議事堂の見学である。今年は米国人グランティ15名もの参加があり，盛会となった。

また，栃木県宇都宮市周辺の文化探訪ツアーを毎年10～11月ころに2泊3日で実施している。これは同市の国際文化交流会の協力をえているもので，米国人グランティはホームステイを楽しんでいる。

このほか，国際交流基金からフィルムを借用し，日本文化に関するフィルム上映会とレクチャーを年4回ほど実施している。また，日米教育委員会の依頼により，毎年6月に来日するIEA（International Education Administration）関係者を築地市場や能，歌舞伎，文楽などの見学に案内している。

3.　研究支援小委員会（平野健一郎委員長）

これは米国人グランティの研究活動を側面から支援するための小委員会だが，近年ではあまり際だったニーズは出てきていない。

4.　自宅歓迎小委員会（川平朝清委員長）

これは米国人グランティを日本の家庭に招き，くつろいでもらおうとするものだが，米国人グランティも早々に日本人の友人をつくるようになり，昔ほどの需要はないようである。

ホスピタリティ委員会は，こうした活動のほか，同窓会会員を対象にセミナー，懇談会を適宜開いている。これらの活動はすべて担当委員の方々の努力によるところが大きい。さまざまな活動を広げ，充実させていくうえでも，みなさんのご支援をさらにお願いいたします。とくに，若い方々の活動への参加を切に要望します。

（ホスピタリティ委員会委員長　久世　篤）

◎グランティーの最高裁・国会見学

東京同窓会ではホスピタリティー委員会が担当して，アメリカン・グランティーの最高裁・国会見学を実施してきた。1993年度は5月18日午後に行われた。

参加者は年々増加の一途をたどり，アメリカン・グランティーとその家族が22人，同窓会関係役員，日米教育委員会の関係者も加わって，総勢約30名になった。

最高裁では，フルブライト留学生であった藤島昭裁判官，国会では同じく津島雄二国会議員のお世話になった。一般的な見学コースのほかに，通常の見学では立ち入り不可能な最高裁裁判官室，議員会館内の議員室に表敬訪問をしたり，英語ビデオテープによる日本の裁判制度の解説，これにつづく会議室での英語による質疑応答。議員会館では津島議員の英語による熱弁等があった。内容豊富で，見学者たちはかなり満足されたものと見られた。

惜しむらくは，最高裁でも国会でも時間不足で，質疑応答の際にかなりの質問が積み残しになってしまったことだ。これは毎年のことで，工夫を要するところであるが，グランティーの参加者はいずれも多忙で最高裁と国会の見学を別の日にすることに難があり，くわうるにグランティーのなかには遠隔地から来る人もいるので，終日はとりがたく，この点は関係所の悩みの種である。

（ホスピタリティー担当副会長　高澤廣茂）

最高裁・国会見学に参加した一行

◎アメリカン・グランティーの宇都宮旅行

文化活動小委員会は，宇都宮市のボランティア団体「いっくら国際文化交流会」（Inter Cultural Community Life Association）の協力をえて，1990年からアメリカン・グランティーのための宇都宮旅行を行っている。

93年の第4回宇都宮旅行は，11月2日から2泊3日の日程で実施された。内容は，1日目が宇都宮市立中央小学校訪問，宇都宮市長表敬訪問，栃木県立博物館など。2日目は，日産自動車栃木工場見学，益子訪問など。3日目は，日光周辺を探訪した。

日産自動車栃木工場を見学するアメリカン・グランティーたち

グランティーたちが日米教育委員会に提出したレポートから，グランティーたちの反応がうかがえる。その一部を紹介すると——。

「日本滞在中のハイライトだった」（91年，ルーゲンビール氏）「私と私の家族にとって最も意義のある体験だった」（92年，ヘイリー氏）「宇都宮のホームステイはすばらしいものだった。この旅行の真の意義は日本の人々がどのように生活しているかを知ることができたことだった」（93年，グリア氏）「研究生活から解放されて，とりわけ楽しい息抜きとなった」（93年，レーン氏）

このような声にもかかわらず，グランティーの参加者は毎年少ないのが残念です。90年が5人，91年が9人，93年が3人でした。この旅行の世話をしてもよいという方がおられましたら申し出ていただきたいと思います。

（文化活動小委員会委員長　三上紀史）

事務局便り

フルブライト同窓会・財団・委員会の区別

フルブライト同窓会の殆どの人にとって下記の三つの組織の区別がつかないようですので御説明します。

フルブライト委員会（日米教育委員会）

日米両国政府によって作られている組織で，フルブライト奨学生の選考と奨学金の支給をします。私達同窓生も皆お世話になった組織です。

現在の事務所は東京の赤坂見附の近くにあります。

住所：東京都千代田区永田町2-14-2
Tel　：(03) 3580-3231

フルブライト同窓会（ガリオア・フルブライト同窓会）

かつてフルブライト（又は，ガリオア）奨学生だった人達を会員とする所謂同窓会で，全国10地区に各々地区同窓会が組織されています。全国的に関係のある問題・行事に対しては，地区同窓会の代表で組織されるガリオア・フルブライト同窓会全国理事会があって，東京同窓会が会長・事務局を兼ねています。

ガリオア・フルブライト同窓生の総数は約六千人ですが，すでに亡くなられた方や海外に居られる方を除いた実数は約五千人で，そのうちの約三千人が東京同窓会に所属しています。

東京同窓会の事務所は東京・麹町の日本テレビの近くにあります。

住所：東京都千代田区二番町9-2
Tel　：(03)　3221-1841

フルブライト財団（日米教育交流振興財団）

御承知の通りガリオア・フルブライト同窓会では主としてアメリカからの奨学生の人数を増やすために，同窓会・企業から募金をしています。寄付者に税法上の便益が得られるように同窓生によって作られたのが，フルブライト財団です。去年・今年のアメリカ人フルブライト奨学生の約半数は財団の募金で支えられています。

財団の事務局は東京同窓会と一緒になっています。フルブライト同窓会とフルブライト財団は同じ場所に在りますが，フルブライト委員会は，別の場所に在ります。どうも皆さんの多くはその辺を承知されていないようですので，御留意下さい。御用の際は，その内容に応じて該当する組織に御連絡下さい。

（事務局長　加藤弓弦）